

日本養豚大学校 ～養豚哲学の共有と確立された 技術の实地教育を目指して～



一般社団法人日本養豚協会 係長 海老原 達之

1 はじめに

わが国の養豚業における強力な担い手の育成を目的とする「日本養豚大学校」が2013年9月に開校し、今年で開校10年目の年となります。豚流行性下痢（PED）などの疾病状況や新型コロナウイルス感染症の影響を受け、休講することもありましたが、2022年度には第7期を3年ぶりに開講し、2月に全課程が無事に修了しました。これにより、第1～7期生までの修了した受講生は、延べ255名になりました。

本校では現在まで「初級コース」を実施しており、1年間に約50時間に及ぶ講義および実習を3スクールに分けて行っています。

2 日本養豚大学校誕生の背景

近年、わが国の養豚をめぐる経営環境が厳しさを増す中、さまざまな政策的課題がある一方で個々の経営体質の向上が養豚業全体の競争力につながるとの認識が業界内で広がっていました。

一般社団法人日本養豚協会（JPPA）の国際競争力強化検討委員会が取りまとめた報告書『養豚白書』の中で、国内養豚における繁殖成績・肥育成績の両面が、欧米諸国に比べて大きく遅れをとっている現状が改めて示された事を受

け、次世代の経営力や生産技術の向上を目的に、業界内で常設の教育機関を設けて一定のカリキュラムのもとで人材育成を図ることが決まりました。

そこで、JPPAが中心となり一般社団法人日本養豚開業獣医師協会（JASV）および麻布大学の協力を得て、生産者、獣医師、大学関係者で構成された日本養豚大学校設立準備委員会を設置し、新しい教育の場“日本養豚大学校”の設立に向けてカリキュラムや運営体制などを構築しました（写真1）。



写真1 設立準備委員会の様子

そして設立協賛企業による寄付金の協力を得て、2013年6月に養豚産業の新たな常設の教育機関「日本養豚大学校」が誕生しました（写真2）。



写真2 JPPA・JASV・麻布大学による日本養豚大学校設立記者会見の様子

講師陣には、JASV、麻布大学で活躍する獣医師をはじめ、第一線で活躍する養豚生産者や業界関係者、さらには公益社団法人全国食肉学校など養豚業以外の関係者を迎えました。日進月歩で進化する知見、全国の養豚生産者が日々試行錯誤して確立してきた技術を、内外から体系的に収集・整理して知識化しました。本校は、その正しい知識を効率的かつ効果的に産業全体に普及していく事を目指しています。これは、養豚に関する包括的な知識、飼養管理の基本的な技術などを養豚に携わる後継者や従業員に体系的に教えるための産学官民共同の教育機関として、国内では初めての取り組みとなるものです。

また、JPPAと麻布大学は包括協定を結び、日本養豚大学校の実習会場や卓上講習を行うためのメインキャンパスの提供を受けており、最新の設備のそろった万全の体制で運営しています（写真3）。

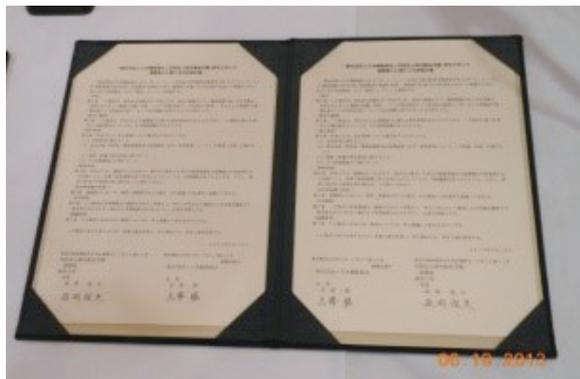


写真3 麻布大学と結ばれた包括協定

3 日本養豚大学校の講義内容

本校では、1スクール3日間×3回合計9日間を1期としたカリキュラムで行っています（写真4～13）。講義科目は養豚全般、繁殖～肥育管理技術、疾病コントロールとバイオセキュリティ、農場施設管理設備、流通～食肉実態などの内容です（表1、2）。受講生によっては、すべての飼養部門を経験している方もいれば、大規模農場で働いている方のように一つの飼養部門しか経験したことがない方もいます。本校のカリキュラムは、養豚の一連の流れをつかむ内容となっているため、担当部門の技術的なスキルアップだけでなく、前後の飼養ステージを考えながら所属部署を担当することができるようになるなど、幅広い視野の取得につながっています。

講師は、繁殖学や繁殖実習、解剖実習などは実習施設がある麻布大学の先生が担当します。同大学は、実際に豚を繁殖～飼育～解剖まで行える、日本でも数少ない設備を持っています。また、スクール毎に受講者の班編成を行い、グループミーティングを実施し最終日にグループ発表を行います。グループミーティングを行うことで、自農場の課題など意見交換をする場となり、受講生同士の交流も深まります。その他にも、受講レポート、次のスクールまでの課題作成も取り入れており、取り組んだ課題は1人ずつ発表を行います。本校では受講するだけでなく、交流、レポート作成・発表とスキルを磨けるような取り組みも実施しています。

限られた期間の中で養豚のすべてを学び、覚えることには無理がありますが、講義を受けることで養豚を学ぶ視野を広げ、所属する農場をよりよい方向へ導くノウハウの取得につながると考えています。

表1 初級コースのカリキュラム

全3 スクール	1日目	2日目	3日目
第1スクール	【産業】 養豚産業の社会的責任と役割／養豚の哲学／養豚経営の基本 【衛生】 バイオセキュリティの意義と実践／ 【管理】 豚の声を聞き体温を感じる管理／養豚を楽しく働くために (懇親会)	【全体】 養豚の仕事とベンチマーキング 【繁殖】 ボディコンディションと初乳の重要性／繁殖成績の取り方とチェックポイント 【実習】 豚の扱い方／ボディコンディションとP2（背脂肪厚）の測定 グループミーティング	【繁殖】 母豚を知る：雌豚の繁殖生理を中心に／人工授精と妊娠鑑定／妊娠豚の管理と繁殖障害 【実習】 人工授精の基礎／妊娠鑑定と直腸検査 グループミーティング
第2スクール	◆ 課題発表 【衛生】 養豚場におけるバイオセキュリティの基礎／PRRS（豚繁殖呼吸障害症候群）のコントロール／分娩舎内の管理・トラブルシューティング／離乳舎の管理・トラブルシューティング 【管理】 グループシステム入門 グループミーティング	【管理・施設】 養豚のふん尿処理と環境規制 【衛生】 肥育舎の管理・トラブルシューティング／豚の臓器とその役割・病気、解剖実習について 【実習】 離乳豚の解剖 グループミーティング	【衛生】 農場HACCPとGAP、5S（整理、整頓、清掃、清潔、しつけ）／豚の法定伝染病と、その防疫対応 【管理・施設】 豚舎における換気、環境のコントロールの基礎 【栄養・飼料】 豚の栄養と飼料の基礎／繁殖豚・肥育豚の給餌と給水 グループミーティング グループレポート発表
第3スクール	【流通・食肉】 群馬県食肉卸売市場にて講習および見学／ガイダンス、と畜の流れ／豚処理施設・部分肉処理施設の見学／安全な豚肉を食卓に届ける検査の現状／セリ場にてセリの見学／枝肉から部分肉、食肉卸の原価計算と流通／部分肉の模範カット見学、試食	◆ 課題発表 【衛生】 消毒と駆虫 【管理】 養豚におけるアニマウェルフェアの対応 【経営】 出荷コントロールがもたらす利益／生産者講演 グループミーティング (豚肉試食会、懇親会)	【飼料】 飼料米・エコフィードの可能性と注意点 【経営】 生産者講演／養豚業下での仲間づくり一緒に前進する グループミーティング レポート発表・総合討論 修了式

資料：筆者作成

注：上記カリキュラムは第7期の内容。講義内容や時間割は変更となる場合があります。

表2 これまでの開講実績

初級コース	第1スクール	第2スクール	第3スクール
第1期	2013年9月	14年9月	14年11月
第2期	2015年5月	15年7月	15年9月
第3期	2016年5月	16年8月	16年10月
第4期	2017年5月	17年7月	17年9月
第5期	2018年5月	18年7月	18年9月
第6期	2019年5月	19年7月	19年9月
第7期	2022年9月	22年11月	23年2月

資料：筆者作成

注1：第1期はPED発生拡大の影響で1年間休講しました。

注2：第6期から第7期の間は新型コロナウイルス感染症拡大により、2年間休講しました。

4 講義以外の特長

本校はカリキュラム以外にも貴重な学びの場を提供しています。

一つ目は「仲間づくり」です。全国から養豚生産者が集まり、大中小の飼養規模の後継者や従業員が男女問わず集まります。同じ志を持った仲間に出会えることで、互いに刺激し合いそして学んでゆける環境になっています。地域差や農場差があると思いますが、この機会に違っ

た目線を知る良い機会になっています。

二つ目は「学びの場の提供」です。受講生およびスタッフなどは同じホテルに宿泊します。宿泊先のホテルの一室を利用して、講義が終わったあとも、皆で集まり勉強や飲食ができる場所で獣医師の先生や業界関係者も参加した養豚談議で盛り上がっています。

三つ目は「獣医師が常駐」していることです。開講期間中は本校副校長の日高先生が滞在し、JASVからも若手獣医師を派遣されています。そのため、講義の休み時間や宿泊先の学びの場でも獣医師に相談することができます。講師には聞けなかったことや自農場での悩みなど、気軽に聞ける機会があります。

仲間や獣医師、そして講師などに出会える場ですので、限られた受講期間中に講義以外の場をフルに活用し、勉強会や食事会を率先して行って、人脈を広げていくことができます。

5 おわりに

本校では、受講生が作成したレポートを受講生の所属している農場に返却します。課題作業では農場の協力が必要ですので、情報を共有しながら取り組み、農場全体で活用できるようなレポートの作成指導を心掛けています。また、受講レポートは講師にも共有し、次期開校に向けてより良い内容になるように取り組んでいきます。養豚業における後継者や従業員の教育の場として、本校を是非ご活用いただければと思います（表3）。

表3 募集要項等

概要	校長 志澤 勝、副校長 日高良一、運営委員長 稲吉弘之
主催	(一社) 日本養豚協会 (JPPA)
後援	学校法人麻布獣医学園 麻布大学、日本養豚開業獣医師協会 (JASV)
設立協賛会社	フィード・ワン (株)、日本農産工業 (株)、日本養豚事業協同組合、(有) ブライトビック、(有) コマクサファーム、中部飼料 (株)、日清丸紅 (株)、(有) マルミファーム、(株) メンデルジャパン、グリーン&ウォーター (株)、MPアグロ (株)、(株) センケイ、(株) ピグレッツ、(株) ワイピーテック、フジ化成 (株)、森久保薬品 (株)、ヨシモトポール (株)
受講要件	<ol style="list-style-type: none"> (1) 就業半年以上、生産現場で働く後継者・従業員(現場で使う最低限の用語を理解できる方) (2) 学歴不問。ただし学習意欲のある方 (3) 受講対象者は、経験年数は5年以内、年齢40歳未満の方を優先します。 (4) スクール1～3の日程をすべて受講できる方(代替受講は原則認めません) (5) 受講生が毎回持ち帰った知識や技術について、現場でのフォロー体制が取れる方 <p>※受講者のレポート類に経営者や場長が確認し、学んだ事を現場で実践できる環境を整えていただくこと。与えられた次のスクールまでの宿題をフォローできる体制を整えていただくこと。</p>
受講料	初級コース受講料 1人162,000円(税込) [前払い制] ※実習費用、講義資料および教科書代を含む。 ※交通費および宿泊費・食費は含まない。
定員	36～40名程度
開催時期	次期の開催に向けて準備中。

資料：筆者作成



写真4 講義の様子



写真5 グループミーティングの様子



写真6 マンツーマン指導（模型および生体での直腸検査）の様子



写真7 子宮の説明および子宮への人工授精用カテーテルの様子



写真8 ボディコンディションとP2点確認の様子



写真9 豚解剖の様子



写真10 豚枝肉を部分肉にカットするまでを見学



写真11 豚肉試食会の様子



写真12 意見交換会の様子



写真13 第7期生の修了式の様子

(プロフィール)

千葉県白井市出身

2007年3月 東京農業大学農学部畜産学科 卒業

2007年4月 食肉卸売会社 入社

2014年10月 一般社団法人日本養豚協会 入社(現職)

千葉県の農家に生まれ、幼いころから農業や養豚業に触れ合う。

現在も田畑を営んでおり、休日を利用して稲作を手伝っている。

今後も農業に触れていきたい。